

「合理的配慮」をしていたいただいた経験から

大熊由紀子

手話のありがたさを楽しみしみ味わったのは、山梨で開かれた全国ろうあ者大会の控室でのことでした。そこに足を踏み入れると、手話が飛び交い、楽しげに話が弾んでいました。手話は挨拶くらいしかできない私は、どうやら淋しげな表情をしたようです。親切な方が、すぐに、手話通訳を呼んでくださいました。おかげで私は話の輪に加わることができましたのです。

この翌年、千葉県知事の堂本暁子さんから電話がありました。「阪大を退官なさるのでって？県の健康福祉政策担当参与になっていただきたいのだけど……」

お引き受けした私は、早速、担当者に尋ねてみました。

「審議会の委員に聴覚障害のある方はおられるかしら？」

担当者は言い訳しました。

「手話通訳の体制が整っていないので、車いすの委員に障害者を代表していただいております……」

車いすの人には聴覚の障害の代弁はできないことをこんこんと説いたのが功を奏してか、千葉県の福祉関係の催しや検討会では手話通訳がつくのがあたりまえになりました。

“キラキラ星風の拍手”は、健康福祉千葉方式社関係者の共通語になりました。障害差別をなくす日本初の条令が通った瞬間、県議会の傍聴席が、キラキラ星拍手で埋まった光景は感動的でした。



国際医療福祉大学大学院で「医療福祉倫理特論」の授業を受け持つことになったとき、山梨の経験が蘇りました。ここの大学院生は、昼間は医療、福祉の現場で働き、夜は修士や博士を目指して勉強をする見上げた人々です。にもかかわらず、コミュニケーション障害については知識や経験がないことに気がついたからです。そこで、山梨で手話通訳を手配して下さった「親切な方」、高田英一さんをゲスト講師にお招きすることを思い立ちました。京都から東京・青山の大学院にきて下さった高田さんのお話には劇的な効果がありました。レポートには、「目からウロコ」という文字が繰り返し登場しました。「目からウロコ」のところは省略して、そのいくつかを抜粋してご紹介してみます。筆者は、ナース、理学療法士、作業療法士、介護福祉士、看護教育にたずさわっている人々です。

「考えたこともない視点から高田先生に話していただき、目からウロコが落ちた。自分の中にいつの間にか出来上がっていた思い込みが一瞬にして拭いさられた。外から見えない障害の盲点を解き明かす高田先生は、聾者の思いを伝える貴重な“語り部”なのである」

「聾者の未来のために熱く語っておられた先生の姿に感動した。リ

ハビリテーションの専門家は、身体障害のことは理解できているが、聴覚や視覚の障害は専門外と思い込んでいる」

「聴覚障害者を養護学校に閉じ込めてしまうことなく、同年代の子供の中で“共に成長できる環境”を作ることが大切だと気づいた」

「恥ずかしながら聴覚障害者の方すべてが手話で話すと思っていましたし、ひらがなや漢字を覚えるように手話を習うのだと思っていました。中途からの聴覚障害がそれほど多いとも知りませんでした。コミュニケーションは人間同士の基本事項です。手話が広まって初めて誰にとっても居心地の良い社会となりうるのだと思いました」

「医師の果たす役割は障害者手帳の格付け以外に無い、という冒頭でのご発言は、教訓を多くはらんだ言葉だったと感じました」

「看護の世界に入って 10 年になりますが、今まで、聴覚障害をもった方の生活に関して、きちんと勉強したり考えてこなかったことを、本当に恥ずかしく感じております。看護師は治療が必要な方々のケアをする専門職であり、障害をもった方々の生活の支援は、福祉の役割であるという縦割りの考え方が医療教育にあるのかもしれない」

「医療面の偏重と社会的側面の否定——医療従事者にとって耳が痛いお話でした。なにを聾者の方々が求めているのか、医療従事者にもかわらず正直言って考えたこともありませんでした」。

「高田英一先生のことを調べました。お母様がどんなに素晴らしかったかを知りました。自家中毒で失聴した息子をかかえ、タツさんは世間の無理解にはすぐ行動を起こして近所を味方にしたり、高田家には障害者を隠そうという空気はなかったとのこと。高田先生の人を包み込む柔和な笑顔。そして、ろう者として堂々と、誇りさえ感じる姿は自然でした。人はどう育てられたかが、一生の大きなポイントを占める気がします」

「『手話は言語、手話は文化』という言葉が頭を離れません。自分の言語として覚えていこうと思います。耳の不自由な方という表現がいずれ日本から消えていくように、普段の生活の中で私たちが今使っている言語として手話が利用されればと思います」

